農業専門紙の生分解性マルチユーザー事例紹介記事

（9）　第3608号　＝特　集＝　（毎週火曜日発行）　農機新聞　（第三種郵便物認可）　平成29年（2017）2月21日

特集

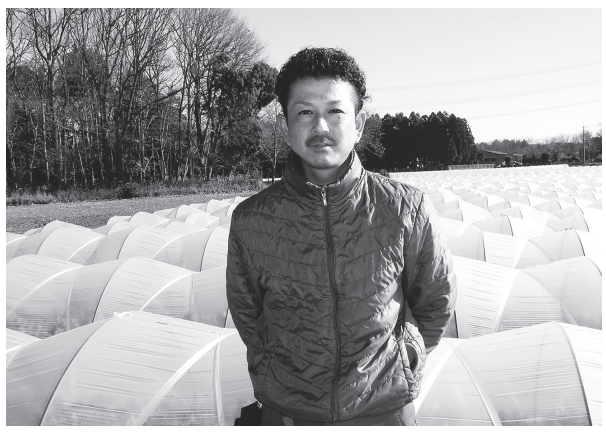
軽労化に貢献する生分解資材

片付けの人件費抑制

「少々高くても黒字に」（八千代町の鈴木さん）

マルチフィルム普及へ

自動車会社の組み立てラインを見学する機会があった。ここで働く人たちが扱う最も重い部品は10キログラムにはならないだろうと聞いた。これに比べると農業分野の遅れが目立つことを痛感した。ほ場でタマネギを満載したコンテナを持てば20キログラムの重さになる。農作業の機械化は進展したが、まだまだ取り残された部分は多い。農作業のさらなる軽労化の実現が求められている。軽労化実現のために各種の資機材がある。軽労化のために活躍するのは機械だけではなく資材も大きな役割を果すことがある。近年、注目されているのが生分解性のマルチフィルムだ。普及率は10％前後だといわれるが、これからの農業経営の大規模化などを考えれば生分解性マルチが増えることは間違いないだろう。生分解性マルチフィルムを巡る状況を特集した。



農業は儲かると語る鈴木茂行さん

生分解フィルムに移植されたレタス

「生分解性マルチの導入はキャベツだった。キャベツを作ると後始末に手間と金がかかった。8年ほど前のことだ」と語るのは茨城県八千代町で野菜生産に取り組んでいる鈴木茂行さんだ。八千代町はハクサイをはじめとした野菜生産に力が入り全国でも有数の野菜産地となっており、周辺には野菜畑が広がっている。

現代農業では野菜生産に各種マルチフィルムが不可欠となっている。八千代町でも畑に展張されたマルチフィルムによって畑全体が白く光る。ここで問題となるのは使用済みのフィルムを片付けることだ。このためそのまま畑にすき込むだけで分解してしまう生分解性フィルムの普及が確実に進んでいる。

従来のポリエチレン製のフィルムに比べて生分解性フィルムは価格が高いことが問題であった。鈴木さんの場合は約2倍になるという。しかし、鈴木さんはこれからも生分解フィルムを増やしたいと考えている。「問題は片付けにかかる人件費なのですよ。そうした諸々のことを考えればフィルム代が倍になっても生分解性フィルムの方がいい。春などはレタス、キャベツの2作に使うので生分解性フィルムを使っても完全に黒字になるのですよ」と鈴木さんは指摘している。

現代農業においては雑草を抑えるためや地温を高めるために各種のマルチフィルムが必要不可欠となっているが、回収の手間や処理法が農業生産者に大きな負担となっている。ここに登場したのが、微生物などの作用によって早く分解されほ場から回収の必要がなくなり、そのままほ場にすき込むことができる生分解性フィルムだ。

従来のポリエチレンフィルムに刺さったトウモロコシの根。これを取り除くのは面倒だ

野菜産地で使用されることが多い。生産者の高齢化が進展していることは野菜作でも同様であり経営体ひとつあたりの栽培面積はこれからもさらに増えると予想されている。鈴木さんは「ここではもう空いている農地がない。山を拓いて畑にするといった感じだ。どこまでできるか。限度はあるが、もっと野菜の栽培面積を増やしたい」と考えている。

生分解性フィルムを使い始めて数年が経過しているが分解過程で風で飛ばされて問題が生じるようなことはないという。

フィルムが分解するまでの時間は土壌条件などによって異なる。ここで鈴木さんの注文がある。「生分解性フィルムが分解するまでの時間が春用と秋用では異なってもよい。春は長くもってほしいし、秋は春に比べれば短くともいい。基本的には使う側が分解までの時間をもたせる感じで作っている。春用だと4カ月もてばありがたい。秋だと作物の生育も早いので3カ月もてばいい。この辺りのバリエーションがあったらいい」という。

就農してから16年が経過している鈴木さんは30代前半の若者だ。これからの農業を支えることになる。「農業は儲かる」ことを実感している。規模拡大が進めば生分解性フィルムを初めとしたさらなる軽労化を実現するための各種資機材がさらに必要とされることになる。